

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 9 日現在

機関番号：33807

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510274

研究課題名（和文）モーリシャスにおけるチャゴス難民の適応問題と国内外の援助活動の動向

研究課題名（英文）The Chagossians in Mauritius: Their Living Conditions & Legal, Political & NPO Support

研究代表者 小池 理恵

(KOIKE Rie)

富士常葉大学・総合経営学部・准教授

研究者番号：80329573

研究成果の概要（和文）：仏領から英領モーリシャスへの転換がモーリシャスを独立国家へと導いた。しかしこの独立の影にモーリシャス包括領土から切り離されインド洋イギリス領とされ、アメリカ軍基地として貸し出された島とその周辺諸島全てから強制移住させられた住民がいることを知らなければならない。Diego Garcia 島を含むチャゴス諸島全体を悲劇的運命に導いたのは米本土からは遠いがあらゆる地域の中心、何処よりもアラブ諸国を望む絶好の地理的条件と自然の環礁が保護する港で、艦船も原子力潜水艦も停泊可能という基地として最大限に利用できる条件といえる。

研究成果の概要（英文）：Turning points in history depend upon a nation's history. History itself, therefore, is artificial and man-made. At this great "turning point" of the bicentenary of the end of French Mauritius and the beginning of British Mauritius, we should not fail to consider the idea of transmigration, which actually connotes both physical and mental movement: departure from one's homeland to another land and the movement of a soul from one body to another. The word accurately describes the disruptive transition of the people of the Chagos archipelago to Mauritius. One of the islands of the archipelago is Diego Garcia, a very important yet relatively unknown US military base used in support of military missions in Afghanistan and Iraq. This paper will highlight the important role played by Diego Garcia in the geopolitical strategies of European and American powers not only in recent years but also since colonial time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：クレオール文化・マイノリティ・アジア系アメリカ文学

科研費の分科・細目：複合新領域・地域研究

キーワード：チャゴス難民・モーリシャス共和国・ディエゴ・ガルシア島・米軍基地

1. 研究開始当初の背景

モーリシャス共和国は、未だ混乱が散在する
アフリカ圏の国々の中で、独立後社会的には

安定し経済的にも成功した代表例として挙げられてきた。1968年に英国連邦の一国として独立し、1972年共和制に移行して以来、多

民族・多言語国家としては比類ないほど、内政的にも外交的にも安定しているかのよう
に捉えられてきた。

しかしながら、2001年に勃発した同時多発テロを機に米国がイラク攻撃に踏み切ったことにより、モーリシャスと米国との軍事的な接点が国際社会に顕在化してきた。それは、米国がモーリシャスの独立当初、ディエゴ・ガルシア島を含むチャゴス諸島から島民を周辺島嶼国に強制的に移住させた問題である。その時点で米国は、後に勃発した湾岸戦争、対イラク戦争を含め対中東戦略の重要な軍事拠点になることを見抜いていたのである。チャゴス諸島は、モーリシャスの一部として統治されてきたが、独立直前の1965年にモーリシャスから切り離され英国領としたあとに、米国に貸与することになり、今日に至っている。そして、チャゴス島難民（以後、チャゴシアンと記す）の帰島問題が英国政府を相手に訴訟にまで発展した。2006年4月に元島民の一部が一時的に帰島を果たしたが、ディエゴ・ガルシア島はインド洋の要所として米軍基地が現存し、英国高等法院が強制退去を違法と認めた今も英国政府には返還要求に応じる気配はない。

申請者はこうしたチャゴシアンの問題は、同時多発テロとそれ以前のアフガニスタン攻撃といった国際政治・軍事問題を背景として、米国を中心とした世界規模での平和秩序を目指す積極的な軍事戦略政策の展開とモーリシャス国内の民族間融和・国民統合、マクロとミクロといった規模の異なる二つの指標のバランスを考慮した上に進展しようと考えるに至った。また申請者は、この問題の解決をより困難にしている一因は、支援団体を除くモーリシャスの一般国民が、チャゴシアン
の帰島問題を国を挙げての重要問題として捉えられていないことにあると仮定する。換言すると、チャゴシアンをモーリシャス国民として積極的に支援する世論と体制を明確化し、国家の目標とする必要がある。そこでそのためには、まずチャゴシアンの実態をモーリシャス国民に明示することが必要であると考え、本研究の申請に至った。調査実施については、チャゴシアンであるジャーナリストの協力を取り付けている。

2. 研究の目的

申請者は、チャゴシアンをめぐる現状とそれに関連した諸問題は、モーリシャス国内からの積極的な支援活動の展開と、「9.11」以後世界的な反戦気運を背景に、関係各国（英国・米国）の世論という二つの柱により解決

に向かうものと仮定する。その点で、本研究はモーリシャス国内のみならず、英米両国をも巻き込んだ国際関係問題を扱うことになる。

しかしながら、申請者の情報ネットワークが形成されているとはいえ、あまりに広範囲になることは避け、一事例研究としてチャゴシアン
のモーリシャス本島における生活実態調査を行い、モーリシャス国民と基地保有国である米国民に提示することを期限内第一の目的とする。そのためにまず、戦略的強制移住の犠牲となり、モーリシャス本島にほとんど放置されたままのチャゴシアンたちの現状を以下の点で検証する：1、島民の意思を無視し、強制的に移住させられたことに起因するモーリシャス社会への適応の問題、2、結果として英国政府を相手に訴訟を起し、墓参のための一時帰島が実現した背景と国際的に見たその影響、3、この一時帰島がチャゴシアンたちの将来にどのような影響を与えるのかという将来的可能性の考察。

チャゴシアン
の適応状況を認知することにより、狭義においては、モーリシャス国内の多民族国家としての国民統合の問題、広義においては、米国の基地問題を再考するきっかけになると考える。またこの事例から国際的政治力にモーリシャスが一国家としてどう立ち向かうのかという民族と国家の支援に対する姿勢の相違あるいは、連帯の可能性を模索する。

継続的かつ発展的研究として、強制移住による貧困化がチャゴシアンを一時的・永久的帰島目的の活動へと導き、米国対イスラムの要所となるインド洋周辺地域が、米国の政治的支配権から離れるための平和構築におけるモーリシャス内外の政策の役割を民族間、国民国家と地域間の関係といった面からの考察も視野に入れる。

3. 研究の方法

<計画の要旨>

主たる目的であるチャゴシアンの実態調査を円滑に遂行するための予備調査（オーラル・リサーチ）を初年度に行った上で、次年度本調査を行う。その間、モーリシャスと英米両国のマス・メディアでのチャゴシアン問題、特に訴訟に関する報道を新聞・雑誌を中心に収集し内容分析する。最終年度には、モーリシャス大学（協力教員有）とカリフォルニア州立大学ロサンジェルス校（協力教員有）にて、調査結果をもとに成果を口頭発表する。

<平成 21 年度>

0. 理論・アプローチの確認 (平成 21 年 5 月～7 月)

地域研究の理論・アプローチの基礎を押えた上で、インド洋上の基地問題を研究テーマとしている研究者の先行研究例を学ぶ

1. 予備調査 (平成 21 年度 8 月～9 月)

1) チャゴシアン難民のリーダーとコンタクトを取り本調査について意見交換する (紹介者とはすでに連絡済)

2) チャゴシアン居住区を参与観察視察し、実施可能人数と条件を把握した上でアンケート調査の協力を依頼する

・「一時帰島したチャゴシアン」とその他のチャゴシアンの分類

・第一世代と二世以降の分類(年齢層の把握)

・その他：教育的背景(権利の請求と人権侵害に対する措置)、職業的背景(生活保障関連)、使用言語(通訳の必要性)の把握

2. アンケート調査項目の確認と質問票作成 (平成 20 年度 10 月～2 月)

予備調査でのチャゴシアンの現状、それに付随する問題の要因を大まかに分析する

チャゴシアンの将来の希望を計画的に実現する上で、本研究が果たせる役割を踏まえ、具体的な質問を精査する

この段階で、本調査の調査法がアンケート調査に適するか、談話分析と日常的活動の分析に適するかのをモーリシャス大学関係者、およびオピニオンリーダーたちと調整する

<平成 22 年度>

1. 本調査 (平成 21 年度 7 月～9 月)

1) チャゴシアンの生活実態調査と分析 (平成 21 年 7 月～10 月)

予備調査にて依頼し、決定した調査法に基づきを実施する

(協力者の人数により、モーリシャス大学の学生にサポートを依頼する)

2. チャゴシアン支援活動に関わる一次資料収集と内容分析 (モーリシャス国内)

(平成 21 年 10 月～平成 22 年 3 月)

1) モーリシャス国内のチャゴシアンを支援する団体とコンタクトを取り、代表者に支援活動の動向とその成果についてインタビューをする

インフォーマント：

・Lalit (代表：Ms. Lindsey Collen)

・Media Watch (代表：Ms. Loga Virahsawmy)

2) チャゴシアン問題の関連新聞記事、雑誌記事の収集と内容分析 (lexpress・lemauricien)

・チャゴシアンと英国政府との訴訟を取り上げた新聞・雑誌記事の収集

・チャゴシアンの一時帰島を取り上げた新聞・雑誌記事の収集

・メディアの論調を分析し、モーリシャスの国家としての支援の立場を明らかにする

3. 関連のワークショップに参加

・支援団体主催のワークショップに参加し、調査結果をフィードバックする

・モーリシャス大学社会学専攻学生たち(特に卒業論文でチャゴシアン問題をテーマとしている)との意見交換

<平成 23 年度>

1. モーリシャス国外(英国・米国)のチャゴシアン支援活動支援活動にかかわる一次資料の収集と内容分析(平成 22 年 7 月～9 月)

1) チャゴシアンと英国政府との訴訟を取り上げた新聞・雑誌記事の収集

2) チャゴシアンの一時帰島を取り上げた新聞・雑誌記事の収集

2. 内容分析：質的分析 (平成 22 年 10 月～平成 22 年 12 月)

1) チャゴシアンを支援するメディア・支援団体が、それ自体反戦を指示するメディア・団体と関連し、あるいは変わっていくプロセスを、収集した一次資料から分析する

具体的には支援団体が最終的に目指すインド洋周辺の恒久平和、安定の達成がチャゴシアンのモーリシャス国内の社会問題から、海外メディアによる広域支援活動へと変化していく背景を「9.11」以後の米国を中心としたイラク攻撃による反戦機運との関わりで分析する

4. 研究成果

「帝国」の歴史の被害者であるチャゴス難民の歴史的背景と彼らの生の声を詳細に調査することが出来た。仏領から英領モーリシャスへの転換がモーリシャスを独立国家へと導いた。しかも無血独立だった。しかしこの独立の影にモーリシャス包括領土から切り離されインド洋イギリス領とされ、アメリカ軍基地として貸し出された島とその周辺

諸島全てから強制移住させられた住民がいることを知らなければならぬし、また同じ米軍基地の被害者である沖縄を有する日本人が取り組むべきことは何かを再確認出来た。Diego Garcia 島を含むチャゴス諸島全体を悲劇的な運命に導いたのは米本土からは遠いがあらゆる地域の中心、なによりもアラブ諸国を望む絶好の地理的条件と自然の環礁が保護する港で、艦船も原子力潜水艦も停泊可能という基地として最大限に利用できる条件といえる。1991年湾岸戦争時、2001年の同時多発テロの後、アフガンへの攻撃もこの島からだった。インド洋上の唯一のアメリカ軍基地の役割は大きい。イギリス政府は自然環境保護というもっともらしい条件で島民を寄せ付けない策略をめぐらせている。

かつての「帝国」がその国力でチャゴス難民帰島の戦いを阻止しようとしている。そこで、日本の研究者として米軍基地をキーワードに沖縄との共同作業が何か出来るのではと考えた。すでに Dialogue under Occupation という国際会議体がチャゴス難民リーダーを沖縄に招きシンポジウムを行っていたが、継続的に対話を行うと共に有識者による意見交換を持つ機会を作る計画である。

最終年度では計画していたアメリカでの口頭発表はできなかった。しかし、UCLA のリオネ教授、モーリシャス大学のウォン教授を日本に招き名古屋大学にて同じ国際シンポジウムにて発表出来たことは、それに代わる取り組みとして十分成果があったと考える。これからは沖縄・グアムの米軍基地問題とリンクしてチャゴス難民問題を継続して追っていく計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. KOIKE Rie, *Path to the Future — Reflections on the Chagossians* —, 富士常葉大学研究紀要、学内査読有、11巻、2011年、pp. 175-188.
2. 小池理恵、「マイノリティ」としてのチャゴス難民、『比較マイノリティ学』Comparative Minoritology、査読有、3巻、2012年、pp. 55-72.
3. KOIKE Rie, *From French-British colonialcoconut plantations to UK-Europe citizenship: The Chagos as a special case of colonial legacy* (印刷中)

[学会発表] (計3件)

1. KOIKE Rie, *The Chagossians: A Special Case of “Authentic” Minority*, 国際シンポジウム・マイノリティ状況と共生言説 II, 7-8/03/2011, 名古屋大学
2. KOIKE Rie, *From French-British colonialcoconut plantations to UK-Europe citizenship: The Chagos as a special case of colonial legacy*, Isle de France, Mauritius: 1810, the Great Turning Point, 11-15/10/2010, Republic of Mauritius
3. KOIKE Rie, *Path to the Future — Reflections on the Chagossians* —, Trans-cultural Mappings, 10/04/2010, University of Sydney

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小池 理恵 (KOIKE Rie)

富士常葉大学・総合経営学部・准教授

研究者番号: 80329573

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: